

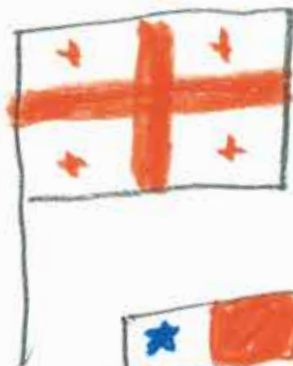
Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 60 号

無料

特集
今こそ
スポーツ
国際交流



スポーツ振興くじ助成事業

Sport
Godzilla®

スポーツゴジラ®

〔第60号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

- 2 | 第60号を発刊するにあたり 長田 渚左
- 特集■
- 「今こそスポーツ国際交流」
- 4 | 国籍も世代も超えたサッカー交流 取材
首藤 正徳
— シニア日本一・ACちば VS. 外国人技能実習生
- 11 | 人を人として尊重する — 小泉卓弥アース電機相談役
- 18 | 100年先を考えた国際交流と支援活動 取材
長田 渚左
— 井上康生
- 28 | ネパールの子どもは誰もが
嘉納先生の誕生日を覚えていた — 須貝等
- 31 | 中国・南京やイスラエル、 取材・構成
波多野 圭吾
長田 渚左
パレスチナでの活動報告 — 山下泰裕
- 46 | 『走』第7回 玉木 正之
「速く走る」には「速く走ろう」と思ってもダメ!?
- 47 | 夢劇場『馬』No.32「魔法のレース」 長田 渚左
- 48 | バックナンバーのご案内

南 伸坊 表紙のつぶやき 「国際交流なら万国旗だろ」と思って国旗の一覧見たら、知らないのがいっぱいある。自分でわからない国旗ばかり描きました。コートジボワール、トンガ、ガボン、ナイジェリア、ジョージア、ソマリア、パナマ」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第43号～58号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第60号を発刊するにあたり

編集長 長田渚左



2015年3月刊行のスポーツゴジラ27号の特集『嘉納治五郎 Who?!』を記憶だろうか。早々に在庫ゼロとなった号である。

巻頭で特定非営利活動法人『柔道教育ソリダリティー』の国際貢献活動を取り上げている。

中国の、それも歴史的に大きな問題を抱える青島と南京に『日中友好柔道館』を設立し交流をしているという報告。さらに対立が続くイスラエルとパレスチナの間でもたちの柔道を通じた交流など、志のある活動に焦点を当てた特集は、スポーツだからこそできる国際貢献活動の大切さをあらためて実感させられた。

ところが、全日本柔道連盟会長などの要職にあり、多忙を極める山下泰裕理事長が活動に時間を割けな

くなったため、同法人は19年に活動を終了。その後、紆余曲折をへて井上康生氏が理事長となり、特定非営利活動法人『JUDOs』を立ち上げた。その経緯と現在の活動について本号で取り上げた。

世界各国・地域での青少年育成や、リサイクル柔道衣や柔道畳の配布などの事業内容も引き継がれたことに安堵している。

来年のパリ・オリンピックを控えて、今年は夏から秋にかけて水泳、女子サッカー、陸上、バスケットボール、ラグビーなど世界大会が続く。どの大会も見どころいっぱいだが、国境や人種を越えた人との交流への視点も忘れてほしくない。

国際情勢がますます混迷を深めている今だからこそ、スポーツだからできることを真剣に考えていきたい。スポーツを通じて人と人が出会い、互いを心から尊重して思いやる気持ちに期待する。そんな思いを込めた60号である。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



株式会社 御福 餅本家

人と社会を支える力



国士舘大学

文藝春秋

上月財団



MS&AD



三井住友海上



三井不動産
MITSUI FUDOSAN

JAPAN SPORT
COUNCIL

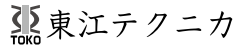


JMOPE 日本女子体育大学

株式会社東美物流



公益財団法人
住友生命健康財団



株式会社
産経映画社

SPN
Security Protection Network

(順不同)

国籍も世代も超えたサッカー交流

——シニア日本一・ACちば VS. 外国人技能実習生

取材 首藤正徳



ボールへの執着は年齢を超える



ボールを追うのは少年の心



試合前にピッチ中央で挨拶をかわすピブス姿の外国人技能実習生とACちば

ピッチには仙人がいつぱい

「おじいさん、すごい！」

75歳のGK和田四郎さんが、体を投げ出して強烈なシュートをはじめ返すと、歓声とともに片言の日本語がピッチに響いた。

6月27日、千葉県市原市のアース電機株式会社・鶴舞研修所のグラウンドで行われた、この日の平均年齢70歳超のサッカークラブ『ACちば』と、25歳前後のインドネシア人外国人技能実習生との交流試合の一コマである。

スピードと体力で上回る若い実習生に対して、高齢チームは局面で数的優位をつくる組織戦術と、熟練の足技で互角以上に渡り合う。いや、走っても、競り合っても負けていない。

実は千葉県に籍を置くACちばは、2022年6月に開催された全日本O-70（70歳以上）サッカー大会で優勝した日本一のシニアクラブ。大多数の選

手が若いころからプレーを続けている猛者たちで、並みの高齢者ではない。

インドネシアの男性の平均寿命は60・67歳（2021年統計）。スポーツをする高齢者を目にする機会などほとんどなかった実習生たちには、ACちばの選手たちがまるで仙人のように見えていたのかもしれない。歓声には、驚きと称賛と敬意が込められているようだった。

そして、何よりも試合中のグラウンドは、国籍も世代も言葉もすべて混じり合った、柔らかな平和な空気に満ちていた。

ACちばとアース電機鶴舞研修所の外国人技能実習生の異例の交流試合は、新型コロナウイルスの感染流行が落ち着いた22年春からスタートした。

研修所は19年にアース電機が市原市の『鶴舞青年の家』を買い取って、外国人技能実習生の入国後1カ月間の講習を実施する施設として再建したもの



実習生(右)のシュートを体を張ってクリアするGK和田四郎氏



ACちばのメンバーたち

で、もともと宿泊施設に加えてグラウンドやテニスコート、体育館が併設されていた。

研修所所長の関和義氏は当時をこう振り返る。

「外国人が大勢入ってくることに地元住民から不安の声もあったので、地域交流を大切にしていきたいという思いがあり、その一環として、前社長（小泉卓弥相談役）の方針で、近隣の方々にはグラウンドや体育館などの施設を無償で開放することにしました」

その直後にコロナ禍に見舞われた。実習生の受け入れができず、関氏が一人でグラウンドの草刈りなどに追われていた頃、ACちばの会員で、Jリーグのマッチコミッショナーも務める川北信幸氏からグラウンド使用の依頼がきた。

「拠点のグラウンドがほしくて、施設を探していた時にたまたま関さんとお会いしたら、使ってください。使用料はいりませんといわれました。それなら私たちが草刈りや芝刈りはやりますと。しかもチー

ムに造園業を営んでいた鈴木栄氏（82）がいて、その指導でグラウンドに目土（めつち）を入れたりしました。今は月に4〜6回くらい集まって練習しています」（川北氏）

体力づくりと特別ルール

コロナ禍が収束に向かった21年4月から、実習生の受け入れが始まった。研修所では雇用先の受け入れ企業で円滑に実習できるように、入国後の1カ月



2022年の全日本0-70サッカー大会で優勝したACちばに、千葉県サッカー協会から贈られた年間優秀チーム賞の表彰状

間、日本語と日本の生活文化、出入国と労働関係の知識を学ぶ。一般的に講習はすべて座学で行われるが、鶴舞研修所では施設を利用した運動を特別に取り入れた。

「雇用先のトラックメーカーから、力仕事もあるので体力づくりをという話もあり、毎日1時間、運動する時間を設けることにしました。どんなことができるのかと川北さんに相談したら『ウォーキングサッカーはどう?』と提案されて、実習生に話をしたら、みんな『やりたい』と。筋トレやランニングもやっています、特にサッカーは人気があります。今はインドネシア人の実習生を40人受け入れています。国技はバドミントンなんです、半数以上が『趣味はサッカー』というほどです。サッカーの練習をしていると自然と試合をやってみたくて、昨年の春からACちばと交流試合をするようになりました」(関氏)

ACちばのメンバーは平均年齢70歳近い高齢者。

一方、実習生は1カ月間の研修期間終了後に雇用先の企業で本格的な実習がスタートする。試合でケガをすることはお互い絶対に避けなければならない。ウォーキングではなく走ってプレーできる一方、特別ルールも設けた。

「相手のボールは奪いにいかない。チャージやタックルなどの接触プレーもしない。あくまで安全に楽しめるようなルールでやっています。熱中して、つい熱くなることもあります、そこは私たちがすぐに止めています」と、レフェリーも務める川北さんはピッチで冷静に試合をコントロールしている。

裸足とスパイク

試合のスタートから1年。交流はピッチの外にも広がった。

交流試合がスタートした当初、実習生の半数以上が裸足でプレーしていた。ある日、実習生が「スパイクを買ってもいいですか」と関氏に聞いてき

た。サッカーのスパイクは安いものでも6000〜7000円はする。実習生たちの月給は手取りで12〜13万円といわれる。大多数がその中から半分近くを家族へ仕送りし、さらに将来のために貯金もしている。「働いてもつと稼げるようになって買えばいいじゃないか」と関氏は論じたという。そのやりとりを聞いた川北氏が、チームの萩庭一彦氏(67)に相談。萩庭氏の提案で使わないスパイクなど50足以上を集めて寄贈し、絆はさらに深まった。

22年4月から23年8月にかけて鶴舞研修所が受け入れた実習生は約530人。インドネシアのほかベトナムやフィリピンの実習生が巣立っていった。卒業1カ月後、雇用された企業で実施したアンケートには多くの実習生が「運動の時間がよかった」と回答していた。来日直後の彼らにとってサッカー体験は、未知の環境での不安と緊張を解きほぐす、ほどこよい息抜きになっていたのかもしれない。

関氏があらためてこう振り返る。

「実習生は一般の日本人との交流があまりないし、あってもその関係は限定されます。研修所では私は指導員なので先生と生徒という関係です。企業に行くとき上司と部下、スタッフという関係になる。対等な交流はなかなかできません。でもスポーツのルールは世界共通で誰もが対等です。言葉が通じなくても、同じルールの中でお互いを尊重し合える。その意味でも日本人との交流の幅が広がるし、すごく入り込みやすくなっていると思います」

ACちばのメンバーたちにとっても、若い実習生との交流は新たな刺激になっている。川北氏は「実習生とはサッカーを通して一緒にプレーしながら、身近に話もするし、記念写真も撮る。確かに国際交流という側面はある。彼らにとってもいい思い出になるでしょう」と話し、さらにこう続けた。

「一方で我々にとっては外国人のサッカーはスタイルが違うので、いい経験にもなっています。みんな

ひざが痛い、腰が痛いと言いながらもサッカーを続けている。特に70代のメンバーは試合をやるという
と燃える。その意味でも貴重な機会になつていま
す。まだまだ青春やつているという感じですから」

スポーツには国籍や人種の違いや、年齢差さえも
超越して、いつの間にか人々の心を通わせる魔法の
ような力がある。それをあらためて実感させられ
た。

試合を終えた後、両チームのメンバーたちは、
ピッチから研修所の食堂に場所を移して、実習生た
ちがつくつたエスニック風味のカレーライスを食べ
ながら、サッカー談議に花を咲かせた。

※芝生の管理に必要な水はけにすぐれたきめ細かい土。

◆ACちば 千葉市に籍を置くNPO法人で正式名称は「ア
スレチッククラブちば」。『千葉四十雀サッカークラブ』が前身
で、2011年4月に現クラブに移行した。メンバーは30〜80
代の約160人。最高齢は86歳で名譽ある金パンを着用し
ている。年間を通じて日本サッカー協会(JFA)、千葉県協
会、千葉市協会、市原市体協主催の大会、リーグ戦に参加。22
年6月に愛媛県で開催された全日本O70サッカー大会で優
勝して初代王者に就いた。

◆アース電機株式会社 1973(昭48)年創業。主に輸入
外国車の改善工事と点検整備、ステレオ、カーナビ等の販売・
設置・修理などの事業で発展。本社は東京都大田区多摩川。
従業員は約280人。07年にベトナムに現地法人を設立。14
年からベトナム研修生受け入れ開始。19年に千葉県市原市鶴
舞にアース研修所を設立し、外国人技能実習生の入国後1カ
月講習をスタートさせた。アース研修所は最大120人収容
の宿泊施設やテニスコート2面、サッカー場を併設。

◆外国人技能実習制度 人材育成を通じた国際貢献を目的
に1993年に創設された。途上国の外国人に日本で働きな
がら技能を身に付けてもらい、帰国後に母国で生かしてもら
うのが目的。最長5年。87職種で受け入れられている。主に海外の
送り出し機関が現地で希望者を募集し、日本の監理組合が実
習先の企業にあつせんする。昨年末時点で32万人余の技能実
習生が働いている。企業側が実習生を人手不足を補う労働者
として受け入れ、低賃金や長時間労働、劣悪な職場環境など
の問題も指摘されている。



人を人として尊重する

取材 首藤正徳

アース電機株式会社前社長の小泉卓弥相談役

2019年にアース研修所を設立し、外国人技能実習生の入国後1カ月講習をスタートさせたアース電機株式会社前社長の小泉卓弥相談役に、この4年間で振り返ってもらった。

——外国人技能実習生とACちばとのサッカーを通じた交流は、実習生にとってどんなメリットがありますか。

小泉 実習生が来日して早い時期に、一般の日本人と触れ合う機会を持つことは大切だと思います。特にスポーツを通じて接することで、緊張や堅苦しさもなく日本人とうち解けることができます。サッカーは実習生にも人気がありますからね。

——ACちばにグラウンドを無償で貸し出しています。そもそも研修所の施設を、近隣住民に無償で開放しているのはなぜですか。

小泉 大勢の外国人を受け入れる研修所を運営するには、地域住民の理解が欠かせません。19年にこの施設を購入した当初は、「施設で何をしているのか」「不安だ」という声も少なからず出ました。なので近隣の方々の理解を得て仲良くするには、施設を開放することが有効ではないかと考えました。

あいさつは国境を超える

——日本語と日本の生活文化、出入国と労働関係の知識を学ぶ1カ月間の講習カリキュラムは決まっていますか、アース研修所では体力づくりをはじめ独自で取り入れていることもありますね。

小泉 あいさつを徹底させています。毎朝、体育館に集まってあいさつの練習をしています。それから施設周りの掃除や草刈りですね。これも毎朝やっています。最初の頃はご近所さんもおつかなびつくりでしたが、今では「おはよう」と言ってくれますね。あいさつができるかできないかで、かわいがられるか、かわいがられないかが決まる。だから大きな声で「おはようございます」と言いなさいと、1カ月間の研修の修了式で、私は必ずその話をします。

——実習生の出身はインドネシアやベトナム、フィリピンなど東南アジアの途上国です。小泉さんご自身もベトナムで勤務された経験をお持ちですね。



アース電機鶴舞研修所で日本語と日本の生活文化の講習を受けるインドネシアの外国人技能実習生たち

食と心

小泉 ベトナムに2年間住んで、私自身が近所さんにお世話になりました。現地に単身赴任して毎朝、6時45分にシャッターを開けて、事務所の前を掃除していました。半年くらいしたら、向かい側の喫茶店の店主に「外国人が掃除をしているのを初めてみた。コーヒーを飲みに来い」と言われて、飲みに行ったら朝食の出前まで頼んでくれた。コーヒー代は取るけど食事代は取ろうとしない。それから帰国するまでの1年半、ずっと朝食をただで食べさせてもらいました。本当にお世話になりました。ご近所さんと仲良くするのは強みだと思いましたね。

—— あいさつや掃除以外にも、実習生を受け入れるに当たって心がけていることはありますか。

小泉 とにかく飯だけはたくさん食べさせることですね。最大93人いたときには3日で米30kgを消費したこともありました。2升炊きの炊飯器で5個分。



講習を受けた外国人技能実習生たちを受け入れる企業は日本各地にある

10升。まあよく食べますね。人間、腹が減っている
とろくなことを考えないですからね。1日3食、ど
んどん出しています。東南アジアの国々はイスラム
教が多いので、肉を食べるのは2週間に1回くらい
ですが、ここでは毎食、鶏肉をメインに出していま
す。

——ひと言で実習生と言っても、それぞれ出身国も
文化も違います。どんな苦勞がありますか。

小泉 ちょうどラマダン（イスラム教徒の断食月）
の時期に40人を受け入れました。クリスマスチャンが2
人いるけど、あとはイスラムなので昼食は食べませ
んという事前情報でした。朝に到着したので昼食は
クリスマスチャンの2人分だけ用意していたら、「私も
食べたい」と言ってくる実習生が10人以上もいた。
宗教上の戒律よりも、とにかく腹が減っていたんで
しょうね。ラマダンは日が沈んでからは食事ができ
ません。みんな夜中の2時、3時に起きて食事をす
るので、スタッフらとおにぎりを握って食堂に並べ



アース電機鶴舞研修所の体育館

たら「足りません」と。そういう意味では最初の頃はバタバタしましたね。

人を人として尊重する

——1カ月間の研修期間を終えた後、実習生たちはあらかじめ決められている受け入れ先の企業で働きます。残念なことに、そこでの低賃金や長時間労働、劣悪な職場環境などの問題が指摘されています。

小泉 本当に残念ですね。一部の企業が実習生を劣悪な労働条件で働かせている。それが失踪やいろいろな問題を引き起こして、大きく報じられてしまう。何をやっているのかと思います。実習生を人として尊重して扱えば何の問題もないんです。（企業に実習生をあつせんする）日本の監理組合が企業に対して実習生への接し方をしっかり指導しなければならぬ。言いにくいことも言わなければならぬ。そのために私も、今は組合の仕事もやっています。

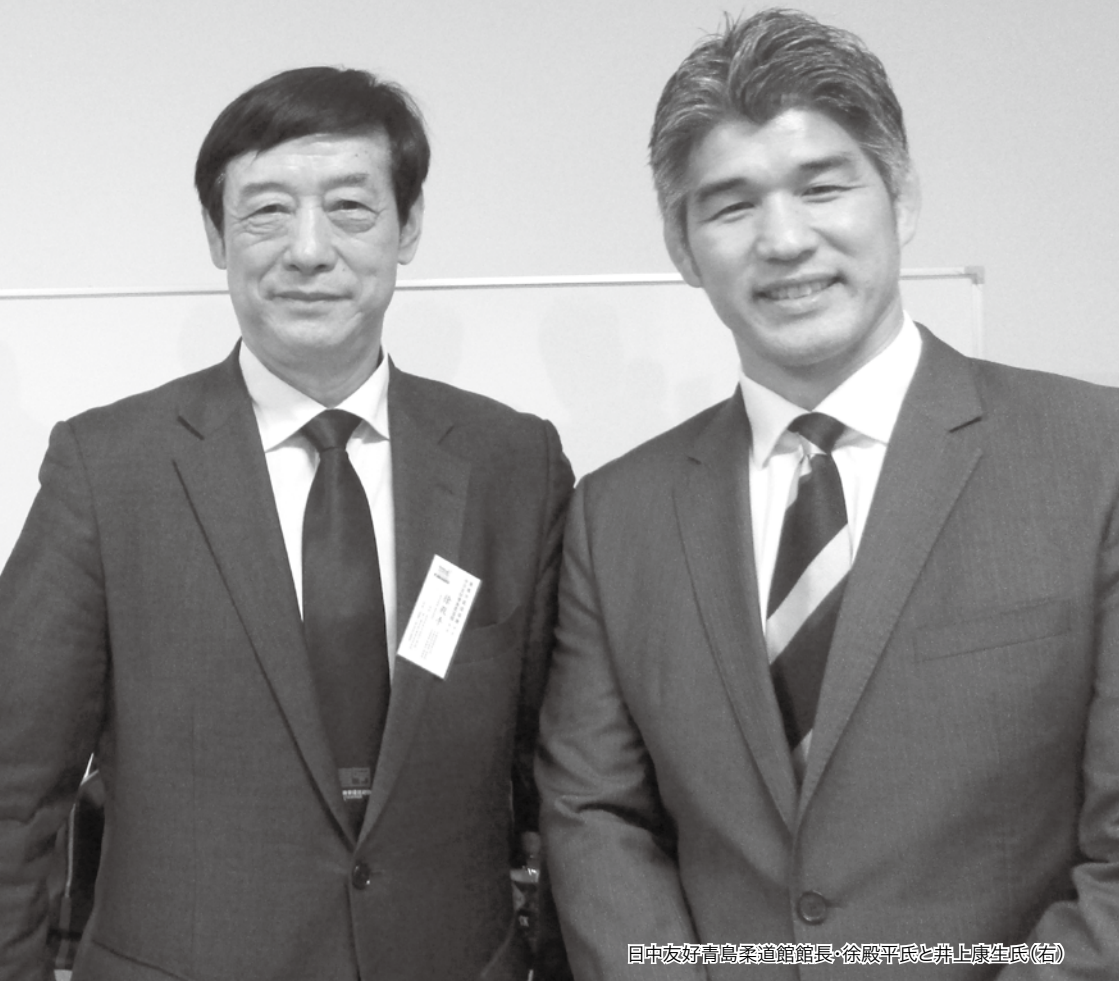


ACちばとの試合をピッチサイドで応援する外国人技能実習生たち

心を配って送り出す

——アース研修所では1カ月間の研修期間終了後、修了式を行っているそうですね。これもオリジナルですね。

小泉 必ず修了式をやって全員に修了証書を配ります。その前夜には私たちスタッフが料理をつくって送り出しパーティーもやっています。実習生の食費は1日1000円ですが、ウチでは計算して余ったら返しています。金額は多くはないですが、現金が少しでも手元にあったほうがうれしいでしょう。実習生に日本に来て技能を習得してもらおうのであれば、気持ち良くやつてもらいたいと思いますから。たまに卒業生からウチのスタッフに「今、こんなことをしています」とフェイスブックに報告がくるんです。そんな話を聞くと、真面目にやっているんだとうれしくなります。



日中友好青島柔道館館長・徐殿平氏と井上康生氏(右)

今こそスポーツ 国際交流

100年先を考えた 国際交流と支援活動

— 井上康生 JUDO's理事長

取材 長田渚左



“总领事杯”第二十二届

中国青島国際柔道公開賽
中日友好青島柔道館 15周年



井上 康生(いのうえ・こうせい) 1978(昭53)年、宮崎県生まれ。2000年シドニー五輪男子100kg級金メダル。99、01、03年世界選手権3連覇、01～03年全日本選手権優勝。16年リオデジャネイロ、21年東京五輪で全日本柔道男子代表監督を務めた。現在、東海大学教授。全日本柔道連盟ブランディング戦略推進委員会の最高責任者。強化委員会副委員長。



ヘリコプターで輸送される量などの支援物資



険しい山道を畳を担いで運ぶネパールの人たち



子どもや女子も一緒に畳を運ぶ

標高3790mヒマヤラ山脈・エベレストへ 畳と笑顔を届ける作戦

2020年9月7日、50枚の畳と131着の柔道衣は東京港を出発し、9月30日、インド・コルカタ港で荷揚げされ、陸路で10月16日にネパール・カトマンズに搬送。さらにトラックで12時間かけてパブル村に到着。そこからヘリコプターで吊り上げて、クムジュン村のヘリポートへ運搬。そのヘリポートから柔道家、村の人、学校の先生などが1枚10kg以上ある畳を頭に乘せて山道を運び、標高3790mにある「ヒラリー学校」へ11月12日にすべて到着した。



ヘリコプターで届けられた量や柔道衣などの支援物資に大喜びするネパールの子どもたち



ナイジェリアのラゴス警察学校に届けられた柔道着

価値と魅力

——コロナ禍の2020年、富士山よりも高所にある標高3790mのネパールの学校に、柔道場の畳50枚とリサイクル柔道着が131着も届けられました。NPO法人JUDOs（ジュウドウズ）を設立し、精力的な社会貢献活動をされています。その経緯について教えてください。

井上 はい、JUDOs以前にも山下（泰裕）先生が立ち上げた『柔道教育ソリダリティー』にも積極的に参加させていただいてきました。例えば（政治的に対立している）イスラエルとパレスチナでの柔道指導や、現役時代にはロシアで指導もやりましたし、柔道教材の製作にも携わってきました。5歳で柔道を始めた自分は柔道で育てていただいた人間でもあり、山下先生の先生にあたる佐藤（宣踐）先生も社会貢献活動に深い思い入れをお持ちで、常々柔道やスポーツの、勝敗だけではない価値や魅力につ

いて教えていただきました。自分はそんな環境で柔道が続けられましたから、微力ではありますが、できることがあれば、少しでも活動したいと思っていました。

——活動を続ける中で、ご自身にも発見がありましたか？

井上 あります。大いにあります。日本から見る世界と、世界から見る日本では、メディアの影響もあるのでしょうか、異なる景色や現実があります。スコットランドに留学したときもそうでしたが、貴重な経験を積ませていただきました。日本から見えるものはごくごく一部だと思っています。例えばイスラエルとパレスチナには、両国が難しい関係にあるというくらいの知識しかなくて行きました。イスラエルは練習場所も多くあり、現役時代からイスラエルの選手との試合経験から柔道事情に驚くことはなかったのですが、パレスチナは柔道衣の上衣は着ていても、下は短パンの子どもが大勢いました。しか

し、どちらの国の人も柔道の練習になると同じように真剣で、柔道の心は同じなんだと実感しました。現場にいないと分からない空気感を味わいました。また、両国の子どもたちが柔道を一緒にするなんて「もつての外だ」と言う人たちもいましたが、現場での調整力や柔道ファミリーとしての心が繋がっていき、同じ道場で合同練習もできました。初めは子どもたちにも互いへのネガティブな感情があつて心を開かずにはいましたが、技の説明をしたり、ウォーミングアップをしていくうちに、徐々に徐々に互いに切磋琢磨していく様子が見られました。

確かな力と思ひ

井上 心が柔道というものに向き合い、柔道を通じて何かが通い合うという実感でした。もちろん、そんなに簡単な世界ではないことは十分承知していますが、スポーツには目に見えないが確かな力がある

という思いを持つことができたのはいい経験でした。

——現役時代の国際試合などで、競技以外の面で現実の世界を体験されたことはありませんか？

井上 勝負の世界で生きていたときは頂点に立ちたい一心でした。ただし、外から見ていると驚くこともありました。世界選手権を二連覇しているイランの強い選手がいました。翌日の試合の組み合わせが発表になって、相手の選手が分かると宗教上の理由で棄権せざるを得なかったのです。自分の家族に被害が及ぶと困ると考えたようですね。日本にいるだけでは感じない感覚、気づかない現実の世界もあるのだと思いました。

——柔道は1964年の東京オリンピックで正式種目になって以来、世界中に普及し、国際柔道連盟には現在204の国と地域が加盟しています。これは国際連合加盟国193（2014年統計）よりも多いわけで、それぞれの国にそれぞれの柔道がある

……とも言えそうですね。さてNPO法人JUDOSの前には、山下泰裕氏の立ち上げた柔道教育ソリダリティー（2006年4月～2019年5月）がありました。各国へのリサイクル柔道衣・畳の支援や、コーチングセミナー開催など、多くの活動が重なっています。柔道教育ソリダリティーをそのまま引き継いでも良かったと思うのですが？

井上 ええ、私も初めはそう思いました。山下先生が活動を止めると耳にして、素晴らしい活動なものもつたいないと疑問に思っていたところ、当時のソリダリティーの事務局の方々から「次にやれるのは康生くんしかいないから……」と言われました。その通りだと思つて自分から山下先生に「やらせてください」と直接お願いに行きました。すると山下先生は、うれしいことだけど、自分の立ち上げたNPOを引き継ぐことはさせない、とはつきりと言われました。事業内容をそのまま引き継ぐのはかまわないうが、ソリダリティーを引き継ぐのなら、オレの後

継ぎにすぎない。大変な仕事だよ。どうしてもやるのなら一からNPOを立ち上げて、理事長になつて、すべてを初めからやるならいい、そうしたら応援する、と言われました。

——また一から立ち上げる？ 理事長が山下氏から井上さんに代わるだけで良かったのではないですか？

井上 私もそう思いました（笑い）。ですが、それはNGだと言われましたので、それでは一から始めようと……。自分の中ではやると決めていましたので、そうしようと考えました。

オリジナルとポイント

——山下先生のお考えを理解されたのですか。

井上 そうですね。もしかしたら覚悟というものをおっしゃられていたのかなと考えました。自分は東海大学に入った時に「山下2世だ」と周囲に言われていました。高校生で獲れるタイトルを総なめにし

たことや、毎年4月29日に開催される無差別級で争う日本選手権に高校生で出場したことが、山下先生以来だったことから、柔道のスタイルはまったく違うのに「山下2世」と言われたのです。自分は山下先生に憧れていましたのでうれしかったのですが、子どもの頃の恩師や山下先生自身からも「お前は山下2世じゃない。井上康生なんだ」とよく言われていました。柔道に限らず、武道には守破離しゅぱりという考え方があります。まず先人の教えを守り、まねをすることから始まる。習得できたらまねはまねにすぎないから、その型を破り、自分のオリジナルなカタチに発展させてゆけ、ということ、自分のオリジナルを作ってゆけるかがポイントになります。だから山下先生はソリダリティーを引き継ぐだけなら後を継いだに過ぎないじゃないか、と後々まで危惧なさって、考えられたのかと思いました。

——うーん、なるほど。実は山下先生がソリダリティーを止めると言い出した時に、私は東海大学ま

で猛抗議に行きました。お止めになる理由を聞くと、大学の副学長をはじめ、重責を担う役職が増えてしまい、多忙すぎることを踏まえて、止める選択に至ったと答えられました。世界における日本の柔道の立ち位置にとっても、創設者の嘉納治五郎氏の柔道哲学、東海大学創設者の松前重義氏の教えを継承する者として、山下先生が今もつとも止めてはならないものが柔道教育ソリダリティーの社会貢献活動ではないですか？ と食い下がりました。どうしてもお止めになるのであれば井上康生さんに引き継ぎませんか？ それもNGなら休活にして、再活動までの何年間は私どもの日本スポーツ学会で預かりますから……もう一度お考え下さいと重ねて申し上げました。それでもYesとは言われず、ずいぶんご機嫌斜めになりました。今考えると、井上さん自身からの申し出を待つていらしたのかもしれない。

井上 それは分かりませんが、外からの見え方も気

になさったのかもしれませんが。もし、その後、私がいくら一生懸命に社会貢献活動に力を入れても「山下の後を継いだけ」と言われるのではないか。オリジナルで立ち上げた方が、どんなに厳しいことも何とか乗り切ろうとするのではないかと考えられた気がします。それにしても今、初めて知りました。長田さん本気で抗議に行かれたのですね（笑い）。実は私も大学生の時に山下先生のとこに「おかしいじゃないですか」と抗議に行ったことがあります。

——へえ？ どうしたのでしょうか？

井上 自分がまだ現役の2004年のアテネ・オリンピックの頃ですが、テレビでパラリンピックの柔道選手の練習風景を目にしました。目が不自由な人たちの練習で、とても真剣な様子だったので思わず見入ったのですが、彼らの柔道着がボロボロだったんです。代表ユニフォームも支給されていないようで、エッ？ 私たちと同じように日本の代表になれ

るように切磋琢磨しているのに、おかしいじゃないかと思い、長田さんと同じように山下先生のところへ直談判に行きました。「おかしいじゃないですか。なぜパラリンピックの選手は自分たちと同じようなサポートがないのですか」と。

変わっていないものと変わらぬもの

——井上さんは現役時代から社会環境や貢献への鋭いまなざしを持たれていたのですね。

井上 嘉納治五郎先生や直接お会いすることはなかったのですが、松前重義先生の哲学や思想などの数々の考え方は、自分の中に染み込んでいる気がします。もちろん柔道を継承してゆく者として、オリンピックに出場すればいいのか？ メダルを獲ればそれでいいのか？ いやそれだけじゃない。もつと価値のあるものがある。いくら時代が変わり、世の中が変わっても変わらないものがある。勝負なんて点に過ぎず、点と点が結び付いて線になってゆく柔

道やスポーツの本質を体得して、それを社会に放出していかなくちゃ……と思うようになりました。もちろん競技者である時は、それはそれでどんな環境であろうと打ち勝っていかなくてはならないと思っていました。でもそれは個としての追求ですから、それだけでいいのか？ 50年先、いや100年後にも日本の柔道は強く、世界から尊敬される存在でなくてはならないから、自らを磨き続けてゆく。個の強さがチームになり、サポートするスタッフも含めて組織全体が熟成されて、日本のカルチャーになっていけばいい……と思っていました。そういう意識がだんだんはつきりしてきたのは引退した後ですが……。そういえばアテネ・オリンピックで敗れて、その後の嘉納杯で優勝しました。大会スポンサーにトヨタ自動車が付いていて車をいただきました。自分はずでに車を持っていたので、どうしようかと思っていたら、新潟県中越地震が10月23日に発生しました。当時観測史上2回目の最大震度7を記録し

た大地震だと大騒ぎになり、甚大な被害が伝えられたので、いただいた車をお金に換えて、新潟に直接持って行き、寄付させていただきました。山下先生も別件で用があり、一緒に行ったのですが、涙を流さんばかりに喜んで「お前はいいことをしたなあ」と褒めて下さいましたね（笑い）。

——それは素晴らしい社会貢献でした。日本は社会貢献活動に対して「素晴らしいね、立派なことだ」と、もつと素直に褒める習慣を育てたいですね。そう言えば「スポーツゴジラ」を発売するきっかけとなったのは、2004年のアテネ・オリンピック開幕に合わせて現地紙に出した「オリンピック休戦」を呼びかける新聞広告でした。当時はイラクをはじめ世界中でテロ事件が頻発していたので、オリンピック休戦への賛同者375人から寄付をいただき、アテネの地元紙に全面広告を出しました。全部で14万部を配布しました。

A n c i e n t P e o p l e l a i d d o w

n their arms for the duration of the Olympics

(古代の人々はオリンピックのために武器を置いた)

この新聞広告の寄付集めにもっとも積極的だったのが東海大学の関係者の方々でした。嘉納治五郎氏↓松前重義氏↓山下泰裕氏↓井上康生氏へと脈々と流れている確かなものを感じます。さてコロナ禍で活動が制限を受けて大変だったと思いますが、現在の活動の進行状況はどうですか。

第2弾、3弾を遂行予定

井上 柔道教育ソリダリティーから活動を継承した日中友好南京柔道館には130人の子どもたちが通ってきています。光本健次国際担当師範と東海大学体育学部の学生2人を派遣しました。ほかには国際オリンピック委員会(IOC)の奨学生として柔道を学ぶ10人の滞在を支援いたしました。2021年の東京オリンピックには6人が出場して女子63kg

級のベネズエラのアンリケリス・バリオス選手が5位に入賞し、男子66kg級のイアン・サンチョ選手はコストリカ初の1勝を挙げて、みんな大喜びしました。来年のパリ・オリンピックまで3人の支援も続けています。私自身は選手強化の仕事があったのでまだネパールには行っていないのですが、2025年あたりに訪問するつもりです。ネパールでの第2弾として人材育成計画を考えています。いろいろな多面から巻き込んでいくつもりです。NPO法人を立ち上げて5年目になります。神奈川県より認定NPOの認可も受けました。コロナ禍ではかどらなかつたことをこれからどしどし遂行していきます。2022年は27カ国に柔道着を1654着、畳を3カ国に366枚寄贈しました。世界の青少年育成の役に立てればと考えています。ぜひご支援ください。

ネパールの子どもは誰もが 嘉納先生の誕生日を覚えていたー須貝等



ネパールのカトマンズで
地元の子どもと記念撮影する須貝等氏



指導者としてネパールに派遣された須貝等氏(左端)と
JUDOの鈴木利一事務局長(右端)



須貝 等(すがい・ひとし)1962(昭37)年、北海道生まれ。中学生で柔道を始める。東海大学一新日本製鐵85、87年世界選手権95kg級優勝。88年ソウル五輪出場。現在は株式会社デフィール代表取締役。

NPO法人JUDOsの派遣でネパールに7日間滞在し、柔道の技術や楽しさ、奥深さを伝えました。

今まで競技者として、さまざまな国で試合をした経験はありましたが、ネパールに行くのは初めてでした。ネパールというとヒマラヤ山脈やエベレストなどのイメージしかなく、どのような事情で柔道が発展し、展開しているのかは未知でした。

21歳以下を対象にした全ネパール少年少女（NECOS）国際柔道大会が3年ぶりに開催されました。ネットで試合の告知をしたら300人近い子どもが集まってきましたが、インフラが整備されておらず、電車がなかったので、遠いところから3日間も歩いてきた子どももいて大変に驚きました。

試合場は一つでしたが、子どもたちは大変真剣な様子で、予選の第一試合から身を乗り出すように見詰め、試合をする喜び、見る喜びに溢れました。

ヒンズー教や仏教など宗教もいろいろで、人種もさまざまなようでしたが、神様というものの思い

はとても強く、柔道の神は嘉納治五郎先生だと皆が信じていました。しかも、嘉納先生の誕生日、12月10日は道場では稽古をせず、パーティーが毎年行われるそうです。日本国内にもインドカレーのお店はあちこちにありますが、そこで働いている人の多くがネパール人だそうです。ネパール人の20%の人が海外に出稼ぎにいくことでした。

日本中に柔道の道場はどこにでもあるので、柔道の大好きなネパールの人たちが日本で仕事をしながら柔道を練習して、ネパールに戻って指導者になるのも素晴らしいと実感しました。

開会式で立派な選手宣誓をした女の子は、幼児のときは路上生活をしていたそうで、後に児童養護施設に入って柔道を学び、今は高校生で学校に通っているそうで「柔道が自分の人生を変えてくれた」とスピーチしました。私自身もそれまで知らなかった人と柔道の結び付きに触れたことで、あらためて柔道の深さを感じました。



寄贈された柔道衣とともに送られた応援の手紙

JUDO'sでは、不要になった柔道衣を集め、 海外にお送りしています！

<https://judos.jp>

ご送付方法

洗濯した柔道衣を上下と帯をできる限りセットにして、JUDO's事務局までお送りください。

送料について

元払い 運送会社に指定はありません。

着払い ヤマト運輸のみ着払いで受け付けています。

南京／初代館長の劉先生と



山下理事長と Санктペテルブルク の子ども



パレスチナ／山下泰裕と井上康生



写真提供 (NPO法人 柔道教育ソリダリティー)

中国・南京やイスラエル、パレスチナでの活動報告

山下 泰裕



山下 泰裕 (やました・やすひろ) 1957 (昭32) 年、熊本県生まれ。77年から85年まで全日本柔道選手権9連覇。84年ロサンゼルス五輪の無差別級で金メダルを獲得し、国民栄誉賞を受賞。85年に203連勝で引退。80年東海大学体育学部卒業。83年に同大学大学院体育学研究科修了。現在、東海大学体育学部教授で副学長。2006年～19年、特定非営利活動法人「柔道教育ソリダリティー」理事長。日本オリンピック委員会 (JOC) 会長。

(本稿は2015年3月2日刊行の27号の再録です)

かつて圧倒的な強さで日本柔道界を牽引した男は、今、柔道を通じた草の根の活動に取り組んでいる。

中国、イスラエル、パレスチナなどの国際交流、青少年の育成、柔道衣・豊のリサイクル事業。

その活動は多岐に渡るが、残念なことに世間にはあまり知られていない。

「世界の山下」は、なぜこうした活動に地道に取り組むのか。自身の口から、その真意を語ってもらった。

.....

私が理事長を務める「特定非営利活動法人 柔道教育ソリダリティー」は、2006年の4月に発足しました。設立のきっかけは、経団連（日本経済団体連合会）の奥田碩さんとの対談です。奥田さんは私がした柔道の教育的価値と柔道衣のリサイクルの話に感激して「あなたは本当に良いことをやっている」とおっしゃってくれて、「でも、良いことをやっているでもそのための資金集めに多くの時間を費や

しているようではダメだ。時間には限りがあるのだから、もつと周りの力を借りていかないと。僕の名前を使って構わないから、組織を作つてやりなさい」とアドバイスもしてくれました。本当にそのような組織を作るべきか悩みましたが、多くの人の支えがあつて何とか発足にこぎ着けることができました。

我々のようなNPO法人の活動は、ある角度から見ると隣国や発展途上国の支援をしているだけに見えるかもしれませんが、しかし、我々が目指すのは単なる支援ではなく、柔道を切り口にして日本の心を世界に伝えていくことなのです。世界中の人々に日本に対して興味を持つてもらい、そして理解を深めてもらう。そうしたことも踏まえ、私たちの法人は「柔道の国際的普及・振興」、「柔道による文化交流、異文化理解の推進」、「柔道による青少年育成」をテーマに様々な活動を展開しており、それらの活動に沿った講演会も開催しています。

日中友好のはじまり

第1回講演会の講師は発足のきっかけにもなった奥田さんにお願ひし、直近の第16回講演会は「日中友好柔道館の歩み」というテーマで開催しました。

日中友好柔道館とは、柔道教育ソリダリティが中心になって設立した柔道場のことで、中国の青島市と南京市にあります。先に完成したのは青島市の柔道館で、2007年に外務省の「草の根文化無償資金協力」の補助を受けて建てられました。なぜ外務省の補助を受けて日中友好柔道館が建てられたのかというと、2004年の私と中国柔道協会の副会長の会話がきっかけになっています。「山下さん、中国の女子柔道は世界的に強く、何の心配もいらな。しかし、男子は五輪でメダルを取ったことが一度もない。4年なんてあつという間で、男子柔道の強化について考えると、夜も眠れない。何とか力を貸してもらえないだろうか」。私は、このことにつ

いて奥田さんに相談してみました。奥田さんは「良いことだからぜひやりなさい」とおっしゃって、すぐに協力してくれそうな企業に声をかけてくれました。とんとん拍子で話は進み、2007年には北京五輪を目指す中国代表の選手たちを日本に招いて一緒に稽古をすることができました。

それを外務省がどこから聞きつけてきて「山下さんの取り組みは素晴らしい。でも今のままでは短期間の交流で終わってしまいます。外務省と協働して長期的な取り組みにしませんか」と、声をかけてくれたのです。そういうことならば中国に柔道場を作るのが良いだろうと考え、外務省の補助を受けて青島に日中友好柔道館を設立することにしたのです。

ハコモノと心

柔道館を建てる場所に青島市を選んだのは、補助金の上限が1000万円と決まっていたからです。1000万円で一から建物を建てることはなかなか

できませんから、既存の施設を利用する必要がありません。具体的には、道場の畳や内装をきれいにし、リフォームする感じです。青島市は、毎年「グランプリ・青島（旧・青島国際柔道大会）」が開催されていることもあつて柔道に対する理解が非常に深く、リフォームに適した施設がいくつかあつたのです。

青島の方々には、柔道館の完成を本当に喜んでもらいました。お役所はハコモノを作るのは得意だと思いますが、そこに心を吹き込むのが我々の仕事だと思つています。そういう意味でも、現地の人々に喜んでもらったのは大変嬉しかったですね。

南京と新聞報道

青島の話が具体的に動き始めると、すぐに南京市から「ぜひ南京にも柔道館を建てて欲しい」と要望がありました。でも、補助金は元々日本国民の税金ですから、私は「そんなに簡単には引き受けられない。柔道館の設立が本当に日中の友好につながるの

か、青島の成果を見たい」と断りました。かなり冷たい対応だったと思います。ただ、心の中では「日中友好柔道館が南京にできたら、すごいことだな」という思いもありました。もし、二つ目の日中友好柔道館を建てるならば、絶対に南京に建てたい。そのためにも青島の柔道館をなんとしても成功させなければ——と、気合いが入りました。

また、同じ時期に、2007年に来日した中国男子柔道チームを監督として率いていた劉俊林先生が、監督を辞めて南京のスポーツ省へ入られた。劉先生は南京市の出身で、人間的にも尊敬できる素晴らしい人です。「劉先生がいるなら、柔道館の建設も上手くいくかもしれない」、そんなことも考えましたね。

南京は日中双方に痛みが残る場所だから、友好を深めるには絶好の場所です。しかも、信頼できる劉先生もいる。条件的にはバッチリだと思いましたが、税金を使う事業ですし、慎重に計画を進めていく必

要があります。でも、そんなことを考えている矢先に「南京に日中友好柔道館建設へ」と新聞にすっぱ抜かれてしまった。「これはまずい」、と思いましたね。南京の話はあくまで私個人が考えていた話で、外務省などの関係者には全く話していませんでしたから。

ところが、外務省の知り合いの方は「山下さん、南京に柔道館なんて良い話じゃないですか。青島の成果なんて待つ必要はありませんよ。すぐに建設しましょう」と言ってくれたのです。それで2008年の青島の日中友好柔道館一周年記念行事の後に、南京へ視察に行くことになりました。

「百聞は一見にしかず」の南京

南京へ行く前は、ずいぶんたくさんの人に「あそこは危険だから、くれぐれも気をつけて」と言われました。でも、声をかけてくれる人に「南京へ行っただことがあるんですか？」と聞くと、誰も行ったこ

とがないと言うのです。私は運命とか天命を信じている人間ですから、普段から何かあったらそこまでの人生だと思っています。だから、この時もとにかく南京へ行ってみようと思った。ただ、今回の話はこつちが勝手に行くのではなくて南京からお願いされて行くのだから、なんとなく大丈夫じゃないかと思っていました。実際、南京へ行ってイメージはガラッと変わりましたね。百聞は一見にしかず。聞くと見るでは大違いでした。

まず、視察に先立って、南京大学で講演を行いました。柔道教育ソリダリティーのミッションは、柔道を切り口に日本の心を伝えることです。どこへ行っても必ずそうした話をするようにしているのです。南京大学での講演も、こちらからお願いでセッティングしてもらいました。

講演の参加者はたしか300人くらいで、内訳は日本人、現地の柔道関係者、南京大学の学生が3分の1ずつ。南京大学の学生の多くは、おそらく日本

語を勉強していたのだと思います。当日は同時通訳での講演だったのですが、途中で通訳用のイヤホンを外す学生が目立ちましたから。講演の最後の質疑応答で、ある学生が「山下さんの日中交流にかける思いは理解できましたが、どうして南京に日中友好柔道館を建設するのですか」と質問してくれました。私は「日本と中国の本当の友好を考えたら、南京以上にふさわしい都市は思い浮かばなかった」と答えました。そうしたら、会場からすぐく温かい拍手が起ったのです。これにはとても驚きました。

穏やかな南京

現地の方々には、滞在中、毎晩のように厚くもてなしてもらいました。日本人なのにこんなに良くしてもらえるのかと、また驚きましたね。嫌な思いは一度もありませんでした。もつと驚いたのは南京の人々が、中国の他の都市と同じように、日本との交流を深めたいと考えていること。より具体的に言え

ば、もつと南京に日本企業が来て欲しいと言うのです。どうしても南京Ⅱ大虐殺という負のイメージがあるから、日本企業は南京を避ける傾向にある。でも、実際は南京の人々は日本との経済交流を希望している。全く想像もしないことでした。

私は、一日だけ現地からの招待を断って、南京に住む日本人の方々々と食事をすることにしました。南京の方々が、柔道館を作ってもらおうと南京の良い部分だけを伝えているのではないかと思ったのです。でも、そんな心配も杞憂に終わりました。現地に住む日本人の方々は、皆、口を揃えて「南京は素晴らしいところ。日本人だからといって、嫌な態度をとられたことは一度もない」と言うのです。ある女性に至っては、「南京の人と結婚して、一生ここに住んでいたい」と話していました。

「南京大虐殺記念館」にも行きました。館内には目を背けたくなる展示もありましたが、入り口には「同じような過ちが繰り返されないように」と書か

れている。また、出口近くには日中友好の歴史に関する展示もあった。我々のNPOには中国に60〜70回は行っている「中国通」の早川さんという人がいるのですが、その早川さんが「南京大虐殺記念館は、想像していたよりもはるかに穏やかな場所だった」と言うのです。「中国の他の抗日記念館はもつと過激だった」とも。南京大虐殺記念館は、単に日本を批判する場所ではなくて、未来へ歩き出そうとする気概が感じられる場所でした。我々のイメージする「南京＝反日の都市」は、全くの幻だったわけです。南京はやはり日中友好柔道館を建てるのにふさわしい場所だと、改めて思いましたね。そして、その2年後の2010年、南京日中友好柔道館が完成したのです。

国旗と課題

青島と南京の柔道館の中には、日本と中国の国旗が並べて掛けられています。南京のオープニングセ

レモニーを取材しに来た記者が「日本の国旗と中国の国旗が並んでいるが、どう思うか」と質問してきました。私は「ここは日中友好柔道館なのだから、二つ並んでいるのが普通でしょう。どちらか片方の国旗しかない方がおかしいのではないですか」と答え、その記者も納得してくれました。でも後から別の人に話を聞いてみると、中国では日本と中国の国旗を並べることはほとんどないそうです。そういう現実があるから、記者は国旗が並べられていることを不思議に感じたのでしょう。でも、柔道館の中では日中間の摩擦なんて関係ありません。お互いを認め合い、皆真剣に柔道に取り組んでいます。

青島でも南京でも、日中友好柔道館は世間の高い評価と関心を集め、その運営も軌道に乗ってきました。ただ、開館から5年以上が経過して、新たな課題が見えてきたのも事実です。例えば、現在南京市の多くの小学校が柔道を必修科目とする準備を進めており、柔道館に多数の指導依頼が寄せられています。

す。しかし、現地の指導者の力量には限界があり、初心者への十分な指導ができていない。そうしたこともあって、我々のところに柔道の指導者向け講習を実施して欲しいとの声が届いています。近い内に向こうで指導者講習会を実施する予定でいます。

支援と現地訪問

中国の他にも、我々は様々な国の柔道を支援しています。2010年には、私と井上康生さんとでイスラエルとパレスチナを訪れました。この訪問に多くの方が驚いたかと思いますが、これには前段があります。

私は訪問のだいぶ前から、日露の柔道を通じた文化交流に取り組んでいました。その時にお世話になっていた外務省のロシア課長が、イスラエルの大使館に公使として行くことになりました。この課長は、日本とロシアをつなぐツールとして柔道が有効に機能していることを理解していましたから、イスラエ

ルへ行く際に「山下さん、イスラエルでも柔道を通じた活動をしようよ。イスラエルへ来てよ」とおっしゃってくれて、イスラエルの日本大使からもそうした内容の依頼をいただきました。何をすればいいか考えた結果、私と井上さんとで対立するイスラエルとパレスチナの両国を訪問し、柔道の指導者講習会とトップ選手向けの強化講習会をやることにしました。最終日にはイスラエルとパレスチナ両国の子どもたちを集めて、柔道教室も行いました。この訪問がきっかけになって、柔道教育ソリダリティーとしてもイスラエルとパレスチナの支援をするようになったのです。

イスラエルもパレスチナも、行ってみてだいぶ印象が変わりました。行く前は、イスラエルよりもパレスチナの方がかわいそうな国だと思っていましたが、イスラエルにも同情するとうるか、あそこも大変な国なのだと理解できました。イスラエルつて、国の周りを敵に囲まれているんですよ。だから、自

分の身は自分で守らなきゃいけない。柔道や格闘技を子どもの時から習うのはそのためなんです。日本にいただけではそうしたことにはなかなか理解できませんから、やっぱり自分の目で見ることがすごく大事なことだと思います。

誤解と融和

2010年12月には、両国の中学生を10名ずつ日本に招き、2週間の共同生活をしてもらいました。滞在の最後には、福岡で開催された「サニックス旗福岡国際中学生柔道大会」に参加しています。子どもたちの受け入れは外務省が全面的に協力してくれてはりましたが、民主党政権時の事業仕分けによって資金を得られなくなっていました。しかし、外務省の方々の熱心な働きかけで、何とか企業の協賛を集めることができました。

それからは毎年イスラエル、パレスチナに日本から柔道の指導者を派遣していますし、両国からの指

導者を日本に受け入れて1カ月間の合同研修会も行っています。昨年は、両国に加えて、ラオス、コートジボワール、中国、タンザニア、グアム、アメリカから指導者を招き、8つの国と地域合同の指導者研修会を行いました。

イスラエルとパレスチナの選手や子どもたちを集めると、摩擦が生じるのではないかと心配される方がいると思います。事実、数々の事業がそれで失敗しています。でも、私たちの事業ではそうしたトラブルや失敗はほとんどありません。こうしたイベントをやる際には、必ず第三国の人間も入れるんです。そうすることで、お互いの国に対する抵抗感がなくなり、2010年の中学生のケースで言えば、イスラエル、パレスチナに加えて日本の子どもたちも集めました。移動時のバスでは、最初は同国の選手同士で固まって座っていましたが、次第に打ち解けて、3カ国入り交じって座るようになりました。食事も別々のテーブルで食べていたのが、同じテー

ブルで食べるようになりました。そして、何よりも柔道を通じてそれぞれの国に対する誤解が解け、仲良くなったのだと思います。滞在終盤の大会では、お互いの国を応援する姿も見ることができました。

平和と柔道の精神

中学生の滞在は2週間と短く非常にタイトなスケジュールでしたが、広島市の平和記念公園も訪問しました。両国の関係者に、可能であれば子どもたちを広島へ連れて行きたいと打診してみたところ、「どんなにハードな日程でもいいから、ぜひ連れて行って欲しい」と言ってもらえたのです。公園を去る際に、指導者のひとりが「全てを原爆で失った広島が、こんなに近代的な都市へと繁栄している。ここに我々の希望を見出せた気がする」と話してくれました。現実には、お互いを理解するのに色々と難しい部分があるのかもしれませんが、お互いを隔てている壁は、幾層にも憎しみや恨みが重なり合い、我々が

想像しているものよりもずっと高いものでしょう。事実、パレスチナの指導者は「今我々が母国に帰ったとしても、両国の選手が同じ畳の上に立つことはないだろう」と語っています。しかし、「我々の子どもと一緒に柔道のできる時代になるように、ともに汗をかいていきたい」とも語っているのです。柔道には「戦う相手は敵ではない。相手がいるから自分を磨くことができる」という考え方があります。柔道の精神でもっとも大切なのは、相手に対する敬意、尊敬の気持ちです。そして、それを表現するのが日本式の礼、お辞儀です。柔道は格闘要素があり激しい競技ですが、こうしたことがきちんと理解されていけば、他のスポーツよりもお互いを理解するのに適した競技なのです。私には、イスラエル人とパレスチナ人の区別がつきません。それくらい、外見は似ているのです。肌や髪、瞳の色が違うわけじゃない。そうした意味でも、同じ柔道衣を着て、同じ畳に上がっている時は人種や民族なんて関係ない

と思うのです。

2014年5月に安倍首相がフランスのオランド大統領と日仏首脳会談を行い、日仏共同声明を発表しました。その中には、世界の平和維持に貢献するために、日仏の柔道連盟が協力してイスラエル、パレスチナに柔道の指導者を派遣することが盛り込まれています。もちろん、これは昨年初頭から我々と外務省とで詰めてきた話で、本来であれば12月に私が日本側の代表としてイスラエル、パレスチナを訪れるはずでした。

しかし、皆さんご存知の通り、現在フランスはイラク、シリア等の国と戦争状態にあります。そうした状況下においてはフランスからの指導者派遣は難しい、11月の段階で12月の指導者派遣は延期しようということになりました。

日仏共同声明に盛り込まれていることですから何とか2014年度内にやりたかったのですが、先日パリでテロ事件が起こってしまったこともあり、実

現は当分難しそうです。しかし、柔道はそうした国々をも結ぶ可能性を持つていると思うし、我々は柔道が好きで上手になりたいと思っっている子どもたちのできる限りの支援をしていきたい。可能であれば、イスラエル、パレスチナの子どもたちも、また日本へ招きたいと考えています。

国益と人間教育

2014年の2月には、アラブ首長国連邦（UAE）の阿布ダビ首長国の皇太子が来日されました。柔道の稽古風景をご覧になりたいとおっしゃるので、東海大学付属高輪台高等学校にお招きしました。経産省の方々から聞くところによると、UAEとはここ2、3年の内に大きなオイル権益の契約更新があるそうなんです。だから経産省はかなり神経質になっていて、できる限りの協力をして欲しいということでした。

皇太子は元々柔道に関心があったようで、高校生

の稽古を見た後に「2020年の東京五輪には、ぜひUAE出身の選手を柔道競技に参加させたい」とおっしゃっていました。皇太子が「UAE出身の選手」とおっしゃったのは、現在のUAE代表選手のほとんどがモルドバ出身だからです。モルドバは現在経済的に厳しい状態にあるので、他国へ活躍の場を求める選手が多いのです。UAEの柔道チームはそうした帰化選手がほとんどなので、わざわざ「UAE出身の選手」と言わなければならなかったのです。

UAEとの交流は国益にも関わってくるものですから、我々もできるだけの協力をしていくつもりです。UAEは発展途上の国ではありませんから、経済面での支援は必要ありません。指導者派遣や現地での指導者講習会などが支援活動の中心になっていきますが、最近になって学校教育に柔道を取り入れようとする動きが出てきました。柔道の人間教育の面が評価されていることだと思います。こうしたことに

関しても、できる限りの協力をしていきたいと思っています。

リサイクル柔道衣とスポーツ外交

柔道教育ソリダリティーでは柔道の強化支援だけでなく、リサイクル柔道衣・畳の無料送付事業も行っています。私が国際柔道連盟の教育・コーチング理事になった2003年から2014年2月までに、146カ国、計3万8884着のリサイクル柔道衣と500枚のリサイクル畳を配布してきました。

配布する柔道衣は3つの方法で集めています。一つは、高校に寄付をお願いする方法です。柔道は体育の授業での取り扱いがありますが、多くの人が高校卒業を機に柔道をするのがなくなります。ですから、各学校を通じて卒業間近の3年生に柔道衣の寄付を募ると、かなりの数を集めることができます。二つ目は、柔道衣メーカーに寄付してもらう方法です。各メーカーは、販売基準を満たせなかった柔道

衣や、ルールの変更に伴って販売できなくなった柔道衣を多数抱えています。そうした余剰在庫の柔道衣を寄付してもらおうのです。高校と柔道衣メーカーに寄付してもらった分を合わせれば、中学生、高校生サイズの柔道衣は十分に確保することができます。しかし、子ども用の柔道衣はほとんど集めることができません。ですから、それに関しては柔道教育ソリダリティーで購入して確保します。ありがたいことに、各メーカーの理解もあつて格安で購入することができています。

現地の学校などに柔道衣を普通に送ると、それがリサイクル品であっても入国の際に課税の対象となります。新品であれば課税額はかなりのものになります。ですから、私たちは必ず現地の日本大使館へ柔道衣を送付し、大使館から現地の柔道連盟や学校に寄贈してもらう形をとっています。そうすれば、課税の対象ではなくなるので、どこにも経済的な負担がかからないわけです。

スポーツ外交と親しみ

2014年の1月、安倍首相がコートジボワールを訪問し首脳会談などを行いました。そして現地滞在中、柔道大会「安倍杯」を観戦し、コートジボワール柔道連盟に柔道衣を贈呈しています。この柔道衣は、私たちが首相サイドに依頼されて準備したものです。コロンビア、ブラジル、ブータンを訪れた際にも、我々が準備した柔道衣が贈られています。柔道に限らず、安倍首相はスポーツ外交を積極的に推進しています。何らかのスポーツを通じて現地の方々と交流を深めると、マスコミが大きく取り扱ってくれて、現地の人々がより親しみを持つてくれるのだそうです。

でも、皆さんはなぜ首相が自前で柔道衣を準備せずに、我々のような小さなNPO法人に依頼するのか不思議に思うでしょう。外務省の報道官がおっしゃるには、国費で柔道衣を購入することはできない

のだそうです。転売されたりすると、非常にまずい。本来は自分たちで準備すべきものは重々承知しているのだけど、外務省の規程に引っかかるからできない、と。これからも首相が柔道衣を贈る機会があるのならば、我々としてもできる限りの協力をしていきたいと思っています。

嘉納治五郎の教えとともに

柔道教育ソリダリティーはこうして色々な活動を展開しているわけですが、私の大学の研究室を半分に分けて事務所にしているような、とても小さなNPO法人です。ですから、我々が単独でできるのはこのくらいまでで、これ以上のことをやるのは相当難しいと感じています。本来、こうした活動は日本柔道界全体で取り組んでいくべきことで、特に全日本柔道連盟がその中心にいなければなりません。2015年度からは、柔道教育ソリダリティーの一部の事業が全柔連との共同事業として行われる予定

になっています。徐々にでも構わないので、ゆくゆくは柔道教育ソリダリティーの事業を全柔連の単独事業へと移行させたいと思っています。

昨今、日本と一部の国の関係が難しくなっています。しかしそんな時期だからこそ、こうした草の根の交流を絶やしてはいけないと思うのです。私たちは、日清戦争後の中国に真っ先に支援の手を差し伸べたのが、柔道の創始者、嘉納治五郎先生だったことを忘れてはいけません。嘉納先生の思想は、海外の体育やスポーツにも大きな影響を与えています。そうした意味でも、私たちの活動を嘉納先生も喜んでいてくれるのではないかと思います。日本柔道界の多くの人の力を合わせることで、今よりも活気のある社会貢献活動や国際交流ができると思うのです。

(取材・構成 長田渚左／波多野圭吾)



写真提供(NPO法人 柔道教育ソリダリティー)

【南京と日本】

日中戦争下の1937年12月、日本軍は中華民国国民政府の首都である南京に進軍。短期間で南京を占領するが、その後、約6週間にわたり中国兵捕虜や南京の民間人を暴行、殺戮した。犠牲者は数千から数十万人とも言われており、この一件は「南京事件」、「南京大虐殺」などの呼称で知られる。事件の有無や規模に関する論争は現在まで続いており、日中関係に様々な影響を及ぼしてきた。

【イスラエルとパレスチナ】

現在イスラエルが首都と主張するエルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地とされており、この地を巡って紀元前600年頃から争いが続いた。16世紀には、アラブ人を中心とするイスラム教のオスマン帝国がこの地域を支配。「パレスチナ」と名付けて統治した。一方、争いに敗れたユダヤの人々は世界中に散らばるが、各地で迫害を受け、ナチス体制下のドイツでは600万人ものユダヤ人が殺害される。迫害から逃れようとユダヤ人はパレスチナへ再び集まり、国家としての独立を目指す。1947年11月の国際連合総会にて「パレスチナ分割決議案」が可決。パレスチナの一部地域がユダヤ人国家「イスラエル」に割り当てられることが決まり、翌1948年にイスラエルは独立を宣言。元々パレスチナに住んでいたアラブ人たちはこの分割決議と独立に納得できず、周辺諸国とともにイスラエルを攻撃。以後、現在まで戦争状態が続いている。

「走」第7回



「速く走る」には

「速く走ろう」と思ってもダメ!?

玉木正之

かつてのマラソン世界最高記録保持者——と言
うより1964年東京五輪のマラソンで、国
立競技場内の最後の最後に円谷幸吉選手を追い
抜き、銀メダルを獲得した選手と言うほうが多
くの人に（特に60歳以上の人には）わかりやす
いと思うが、イギリスのベイジル・ヒートリー
選手に、「速く走るのに必要なことは何です
か?」と訊いたことがあった。

すると彼は「器械体操の選手の身体の動きを
観察することだね」と言った。「体操選手には
無駄な動きが全くない。それが参考になるよ」

そのときは彼の言った言葉の意味がよくわか

らなかつた。が、何年か後に塚原光
男氏の話を聞いて、その謎が氷解し
た。塚原氏は月面宙返りムーンサルトなどの新しい技を生み
出し、五輪3大会で金5銀1銅3のメダルを獲
得した選手だが、彼はこう言ったのだ。

「体操は、人間のできないこと、不可能なこと
に挑戦して、できるようになるのではなく、人
間にできる身体の動き方を発見する競技なん
です。月面宙返りも、空中で頭や肩や腰や脚をど
のように動かし、どの位置に保てば、回転の力
を捻りひねの力に変えることができるか、その形を
発見しただけなんです。だから倒立が誰にでも
できる行為なのと同じで、月面宙返りも誰にで
もできる合理的な技なんですよ」

最後の「誰にでもできる」という言葉だけは、
今でも首肯しかねるが（苦笑）、体操の「合理
的な動き」と同じく、「速く走る」という行為も、
最も「合理的な走る形」を見つけ、身に付ける
ことだと納得できた。

「速く走ろう」と思ってもダメ! なんですすね。



夢劇場『馬』

No.32



魔法のレース

長田渚左

今の時代のスポーツで最も重要なのは科学の裏付けだ。スタートはこう飛び出し、中盤はこのペースを刻み、ラストはここから勝負する……。緻密なレース運びは、それはそれで正しいのだろう。でも私は人間本来の性分を頼りにしていた時代が妙に懐かしい。

実は今から80年以上前に自分らしく走ることだけを追求し続けた『鉄砲玉』と言われた日本人がいた。身長162cmの村社講平である。

1936年ベルリン・オリンピックの1万mで彼はトラック25周のほとんどで先頭を走り、11万人の大観衆をくぎ付けにした。

ラスト300mで巨木のような男たちに抜かれて4位に後退してメダルを逃したが、この時にマークした日本記録はその後21年も破られない大記録だった。村社は競技人生のすべてのレースで、

スタートから最速でぶつ飛ばした。周囲からどんなに批判されても、その走法をあらためようとはしなかった。彼は自らのレースをこう語った。
「他人の後ろについて走るのもペース配分も自分の性格に合わない。加えて最後にまぐるような走りも性に合わなかった」

このコメントを読んだとき、1980年秋の天皇賞を制したプリティキャストを思い出した。

柴田政人騎手を背にした彼女はスタートするやいなやハナに立ち、60m、70m……逃げに逃けたカツラノハイセイコ、ホウヨウボーイ、メジロフアントム……人気馬たちをすべて置き去りにする魔法のレースだった。

他馬に寄られるのも他馬と競うのもイヤ、ペース配分や最後にまぐるような走りも性に合わない……3200mを逃げ切った牝馬は他に記憶にない。

性に合ったからこそ自分の最強を發揮できた。彼女も村社と一緒だった。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011
埼玉県新座市野火止8-16-32
株式会社東美物流
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号第61号は2023年12月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

●新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（筑波大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）

／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】
〒359-1192
埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2023年10月2日発行

第1巻第60号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳

波多野圭吾・西本祥子・江川卓実

山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401